

企画名: 市民の意識変容を促しオーガニック給食の拡大・定着を目指す「オーガニック給食食農教育教材作成事業」

団体名: NPO 法人しずおかオーガニックウェブ

1. 報告要旨

地域ぐるみでオーガニックの生産、消費、流通を進める農水省の事業「オーガニックビレッジ」に取り組む市町(令和7年度末で静岡県内8市町)では国の助成を活用して、年に1~5回程度地元産の有機米を用いたオーガニック給食を実践し始めている。しかし、これらの市町においても児童・生徒だけでなく、保護者や一般市民がオーガニック給食を進めることの意義を理解し、多くがそれを望んでいるとは言い難く、今後国の助成事業が終わった時にオーガニック給食が継続できるのか心配されている。オーガニック給食を進める上での課題は食材の価格が高くなることや地元の生産量の少なさなどが挙げられるが、これらを克服するためには市民がオーガニック給食の必要性を理解し、それを求めることが何よりも重要である。

オーガニック給食の理解を進めるための効果的な手段の一つは給食に合わせて行う食農教育である。子どもたちに給食と合わせて食農教育を実施することで、生産現場でオーガニックを進めることや、それを支えるために地元のオーガニック食材を積極的に活用することの重要性を理解してもらうことができ、将来の消費者である子どもたち自身はもちろん、その保護者、さらには市民全体に理解が広まると考え、教材及びそれを活用するための教師用ガイドブック作りに取り組んだ。

編集にあたり、教材を通して以下を子どもたちに伝えることとし、その際慣行農業と有機農業を対立的に捉えないように、有機農業の特徴として「安全・安心」「おいしさ」などを強調しないことに留意した。

- 給食は農産物の生産者をはじめいろいろな人の力を借りて子どもたちに届くこと。
- 食材を生産する農業は本来自然や生き物の循環の力を利用して産物を生み出す営みであり、有機農業はこれらを大事にする、環境にやさしい農業であること
- 慣行農業も食べ物を確実に届けるために大事な農業であり、農薬や化学肥料はそのための役割を担ってきたこと
- しかし、近年農薬や化学肥料が自然の生きものや環境に負荷を与えている面が大きな課題となっており、有機農業の拡大が求められていること
- そのためには、農家だけでなく消費者が有機農産物を選ぶことが重要であること

また、教師用ガイドブックでは、教師に教材の内容の背景を理解してもらうための留意点や関連する公的な資料へのリンクを掲載するとともに、農業にあまり馴染みのない教員でも取り組みやすいように、指導案を2例掲載した。



2025.12.9 実験授業



2026.3.21 模擬授業

2. 成果物

1. 小学校高学年向け教材「[オーガニック給食って知ってる?](#)」、教材活用のための教師用ガイドブック各800部
2. オーガニック給食食農教育教材β版を用いた実験授業の実施(2025.12.9)
「[有機栽培のよさ 一緒に考えよう 島田二小 給食提供に合わせ実施](#)」静岡新聞(2025.12.11)
3. [冊子を使った模擬授業の実施](#)(2026.3.21)